

武田泰淳『富士』論

——精神医療に対する作家の発言を手がかりに——

藤原崇雅

一 はじめに

武田泰淳『富士』は、『海』に一九六九年一〇月から一九七一年六月にかけて連載され、一九七一年一月に中央公論社より初めて刊行された。翌年一〇月には、同社から特製愛蔵版が部数限定で発売されるなど、泰淳晩年の代表作として知られる作品である。本作は精神病院が舞台となったせい、実際に精神医療に携わる人々から批判を受けた。たとえば斎藤茂太「解説」『富士』中央公論社、一九七三・八）は、一九四四年頃にはすでに「インシュリン療法や電気療法」があったにも関わらず、主人公が「治療を患者に施そうとしない」と述べる。医師でもある斎藤は、精神病院の実際と『富士』の作品世界の乖離を指摘している。¹⁾

しかし、その精神病院の状況は、意図的に描かれたもの

と考えられる。「『富士』を書き終えて」『読売新聞』朝刊、一九七一・八・七²⁾で泰淳は、「ヤスパースの論文の話が出てくる」ということになる、八百屋お七の場合でいうと、いつでも吉祥寺に行けたら火を付けないでもすむわけでしょう、「フロイトなどは原因さえつかめれば、すべての精神病は直せるという立場ですが、僕はどうもねえ」と述べ、³⁾「ヒューマニズムということは、うまくいかないことでも、うまくいくという希望を捨てないことでしょう。（中略）精神病学者がその考えを捨てたら何もできなくなるんだから。僕はこの小説でも院長の矛盾をつねに守る立場で書いている」と作品の企図を説明する。泰淳は治療がうまくいかないにも関わらず患者に相対せねばならない医師を描くことを目的としていた。本作では、精神科医の主体のありようという、抽象的な主題の追求が目指されたと

考えられるだろう。

『富士』が連載された一九七〇年前後は、日本精神神経学会内での論争や、東京大学精神科病棟の自主管理など、精神病院や精神科医のあり方をめぐって、多様な議論が展開された時期である。先行論においても、同時代言説と本作との関連性は指摘されてきた。たとえば、佐藤泉「曖昧な肉」〔現代思想〕二〇二・一〇〕は、精神医療の改革に関する議論と、精神病院を批判する登場人物の意見との共通性を析出している。⁶⁾ただ、佐藤論には問題点も指摘できる。それは「精神医療改革、反精神医学の言葉は武田固有のこの「非・人間の曖昧さ」という」主題についてすぐれた触媒となった」とあるように、精神科医への批判を作品の主題として捉えている点である。先に確認したように、泰淳は本作を、精神科医を擁護する立場から描いていた。作中における精神科医への批判は、医療を改革していく可能性として提示されているというより、批判を受けた医師の立場の困難さを描くために設けられた設定と考えられる。泰淳の企図を十分に詳らかにした上で、作品を読み直すことも重要ではなからうか。⁷⁾

以上の見解に基づき本稿では、精神医療に対する作家の発言を起点として作品を再考することで、泰淳が描こうとした精神科医の主体のありようを明らかにしたい。具体的には、次のような論述を行う。まず、対談での発言を整理し、精神医療に対する作家の意見を確認する。次に、作品に取り込まれる「精神

病理学」⁸⁾の知見を確認しつつ、本作において精神病院への批判者と医師の立場が対立していることを詳らかにする。その上で「予感」と「戦慄」、「神の指」と「神の餌」などの鍵語に着目し、本作の主題を明らかにしたい。また、作中に戦時下と戦後、二つの時間が設定されることの意味も考察する。

二 精神医療に対する泰淳の意見

『富士』は二〇章⁹⁾からなり、一九六八年から一九六九年¹⁰⁾にかけて、大島(私)が富士山の近くにある山荘で、実習医をしていた桃園病院での顛末を手記として綴る小説である。戦時下の病院においては「嘘言症」の一条、「黙狂」の岡村、「てんかん」の大木戸、「色情狂」の庭京子、「麻痺性痴呆」の間宮などの患者が登場する。宿直を襲い、院長宅へ放火する患者に医師たちは翻弄されてしまい、最終的には病院全体が「集団発狂」してしまうのである。本作は「精神病者」や「精神分析学」をよく小説の題材としていた泰淳が、精神病院を物語の舞台として設定して世に問うた作品であった。

『富士』の連載が反響を呼んだこともあり、一九七〇年頃から泰淳は、精神科医や精神医学者との対談・座談会に出席している。たとえば「異常と正常のあいだで」〔中央公論〕一九七〇・七)では、作家兼精神科医の加賀乙彦・なだいなだ、桜ヶ丘保養院院長の野口晋二、精神医学者の宮本忠雄と、「文学と

狂気」(『文学界』一九七二・四)では、作家兼精神科医の北杜夫と対談している。また、真継伸彦との対談「生きることの地獄と極楽」(『中央公論』一九七四・二)でも、泰淳は精神医療に対して発言している。

本節の結論を先に述べておくなら、泰淳は精神科医の立場を困難なものとして捉えた上で、同情を示していたと考えられる。たとえば「異常と正常のあいだで」で加賀が、前に勤めていた「精神病院が火事になって十何人かの患者さんが焼け死んだ」際、「新聞記者がいつばい来て」「精神病患者をこんな格子のなかに閉じ込めておくから焼け死んだのだと」「書きたてた」と述べている。加賀の経歴を踏まえると、彼が勤めていた病院は千葉県市川市の式場病院と推定できる。¹²⁾「市川の式場精神病院焼く」(『朝日新聞』朝刊、一九五五・六・一八)によれば、式場病院は一九五五年六月一日の午前一時頃に出火、死者を多く出す惨事が発生した。記事では「監禁病舎は最も凶暴性の患者を收容していたため窓は嚴重な鉄格子になっており、カギがかかっていた」、「火の回りが早かったため監禁病舎のカギを全部は開けることができず死者が多く出た」と、病院の不手際が非難される。新聞記者が取材に訪れ、病院の責任を問う記事が書かれたことに、加賀は憤っているのだろう。

この加賀の発言に対し泰淳は、「ずっと関係している人と、ときどきちょこつと関係したがる人との違い」がある、「専門でない人がやる場合には、ちょこちょこそのときだけ、問題

性を拡大」するため「ジャーナリズム」などの「暴露もの」で批判を行うのは「やさしい」が、「実際にやっておられるかたは受難者」であり、「受難者と、受難者を嘲笑うものとは違う」と述べている。「富士」を書き終えて「泰淳は、精神科医を治療がうまくいかないにも関わらず治療を続ける必要がある(うまくいかないことでも、うまくいくという希望を捨てない)存在と捉えていた。「受難者」という言葉がそのような存在のことを指しているならば、その「受難者を嘲笑う」新聞記者とは、治療が失敗した時だけ騒ぎ立て、医師の責任を追及する存在であると理解できよう。泰淳は、精神科医の困難な立場に同情を示した上で、加賀を擁護しているのである。なお、泰淳は対談において「受難者」という言葉で表した主体のありようを、本作における医師の形象を通じて具体化していると考えられるが、そのことについては本稿第三節で詳述したい。

また、先の発言において「暴露もの」という言葉が見られるが、泰淳は他の対談においても、精神病院の不祥事を暴く動向に言及し、これを批判している。

武田(中略)預かった以上は監視してですね、いろいろやる人がいなくちゃ困るわけです。自由に往来させるというふうな開放病棟がありますけどね。しかし、それのみに頼るのは、また、無責任でしょう。そうするとどうしたって縛るといふか……。

北 個室に監禁する……。

武田 それは必要なんですね。その必要があるんだからね。いま、よく精神病院の暴露物がありますね。あれはぼくは非常に一方的な考えだと思っうんですよ。

武田泰淳、北杜夫「文学と狂気」『文学界』一九七二(四)

武田 (中略)精神病院の暗さとか、儲け仕事とか、患者の監禁状態の暴露ものが以前ありましたね。それはわざわざ患者になって入院状況を暴露するということですね。それを暴露するだけではとても解決できないわけですね。つまり脳が脳を裁くことができるかという問題になる。脳を切り刻んでいくら調べても、脳そのもの、あるいは集団発狂の現象は分からない。(中略)しかし気をつけなければならぬのは、これは集団発狂の現象であると決める判断では、患者以外できるかという、それはそうじゃないでしょう。だから、みんな患者なのに、しかしみんな患者だといって甘ったれて、なしくずしに全人類、全患者論にしてしまったわけですね、申し訳が立たないから。そこがほんとに全人類に対してやさしくするなんていうことはできっこないわけだけれども、しかし少なくとも神経科の医者はやさしくしなければならぬわけですね。

武田泰淳、真継伸彦「生きることの地獄と極楽」

『中央公論』一九七四(一)

「わざわざ患者になって入院状況を暴露する」という発言を踏まえると、泰淳が言及しているのは、一九七〇年三月五日から一二日にかけて『朝日新聞』夕刊紙上に連載された「ルポ精神病棟」であることが分かる。連載第一回(一九七〇・三・五)で「一分足らずの診断で、ニセ患者は、入院を必要とする重症患者に変わった」と述べられているように、このルポは記者・大熊一夫が患者を装って入院し、病院で起きている不祥事を暴露したものだ。連載第二回(一九七〇・三・六)では電気ショック治療の暴力性が、連載第五回(一九七〇・三・一〇)では鎖による患者の監禁が、痛烈に非難されるのである。

もちろん、ジャーナリズムは社会の不正を暴くものである以上、報じる対象への暴力性を常に有している。「ルポ 精神病棟」も、そのような暴力性は免れない。しかしながら、このルポは一九六四年三月に起きたライシャワー駐日大使が精神科治療歴のある青年に刺傷される事件⁽¹⁾を発生して、精神医療が社会的に問題化されつつあった時期に発表されたことで、必要以上の反響を呼んだとも捉えられる。ルポは、通常の報道記事にも増して、医師たちの立場を強く抑圧してしまったのである。

ただ、同時代において、医師たちはメディアから一方的に批判されていたわけではない。ルポ掲載の少し前、日本精神神経学会の理事会は、「精神病院に多発する不祥事件に関連し全会員に訴える」⁽²⁾『精神神経学雑誌』一九七〇(一)を発表している。

この声明では、一九六九年の八月頃から全国の精神病院で、患者虐待などの不祥事が多発していることがまず紹介される。その上で、理事会は「患者の人間性を無視し、障害者を世の偏見と同じく単に異常者として扱おうとする考え」が「精神医療に對する恐ろしい感覚麻痺を招いたとし、「精神科医とは何か」という問いに真剣に答へていくことの必要性を訴える。理事会は不祥事を、精神科医が自らの立場を問い直す機会として捉えていたのである。

以上のように、一九七〇年頃においては、精神病院の不祥事をめぐって、ジャーナリズムと医師たちの立場が対立していた。そして対談での発言を鑑みるなら、ふたつの立場のうち泰淳は、精神科医の側に寄り添っていたことが分かる。特に「ほんとに全人類に対してやさしくするなんていうことはできっこないわけだけれども、しかし少なくとも神経科の医者はやさしくしなければならぬ」という言葉からは、精神科医が実は患者と同等の存在であるにも関わらず、そのことを自覚しつつ治療に当たらねばならないことへの理解が窺える。泰淳は精神科医の困難な立場性を察した上で新聞による精神病院への批判に難色を示していたのである。それでは以下、この作家の立場を踏まえ、作品分析を試みたい。

三 精神科医と精神病院批判者との対立

戦時下の大島は「K 大学医学部」の学生であり、同級生が「すでに出征して、各戦線であたかっている」にも関わらず「右眼が視力を失って」「ため兵役にとられないで済んだ。彼は「戦争と狂気」(初出本文より引用、一章。以下章数のみを記す)という論文の作成を目指す、熱心な実習生であった。大島は理想的な医師を目指して、さまざまな「精神病理学」の知見を学び取る。たとえば「カール・ヤスパースの学位論文「懐郷と犯罪」(六章)は、その代表的なものだ。⁽¹⁵⁾古株の「看護婦」が「ドイツ語の本ばかり読んでいてさ」(八章)と揶揄しているため、大島が手にしたのは *Karl Jaspers, Heimweh und Verbrechen*. (Verlag Von F. O. W. Vogel, 1909) のような原著であると推定できる。大島は宿直の際この論文を読み、見識を深めるのである。戦時下の院長である甘野と会食した際、大島は「懐郷と犯罪」に記されていた、少女の症例を披露している。

「そら、川岸に来たわ。橋を渡った方がいいわ。投げこみやすい所は、どこかしら。傾斜の急なところの方が、投げやすいんだがなあ。ああ、ここがいい。ほら、投げちゃったわ。もう、誰にもわかりやしない。(中略)あの赤ん坊は、きつと睡ったまま死んじゃうのね。さあ、もどりましょう。十五分たった。御主人が起きてきます。騒ぎ出したわ。うちの子供が誘かいされた、と叫んでいるのよ」(七章)

この箇所は、赤ん坊を溺死させた一四歳の少女、アポロニア・Sについて述べられた部分である。藤森英之による邦訳（ヤスパース『精神病理学研究 Ⅰ』みすず書房、一九六九・一）でもこの箇所は「彼女はすぐにその子供を連れて、川ばたまで走り、橋を渡り、他の岸の少し傾斜の急なところへたどり着き、そこで子供を水中に投げ捨てた。彼女はそれ以上振り返って見ないで、同じ道を急いで家に帰り、着物を脱ぎ、ベッドに横になった」と書かれている。ヤスパースが参照する症例を、大島はほぼそのまま甘野院長に説明している。¹⁶⁾

大島が「懐郷と犯罪」を読むのは、以前に甘野の家で起きた、当時四歳であった長男溺死の原因を探るためであった。大島は、溺死事件の犯人として、甘野宅で子守をしている少女・中里きんを疑っている。きんは「白痴じゃないかと疑われるほど、無表情」かつ「陰気で、ひがんで」おり、親類からも「ありやバカか気がいでしょ」（六章）と言われる人物だ。大島はアポロニアの症例を根拠に、きんが事件を起したと仮定する。そして「彼女をお嬢さんの子守りにしておくのは、よくない」（七章）と甘野に迫るのである。

しかし、大島の認識は誤ってしまふ。脱走した患者が甘野宅に侵入した際、きんは勇敢にも犯人に抵抗を試みるからだ。あるとき、伝書鳩をこよなく愛する「麻痺性痴呆」患者・間宮は、自分の飼鳩を甘野が殺害したと思ひ込み、院長宅を襲撃する。間宮は炊事場に置かれてあつた手斧で、甘野の妻や娘に襲いか

かる。そのとき、きんは突然、間宮へ「何も叫ばずにおどりかか

る。きんは侵入者によって斧で傷つけられながらも、院長一家を身を挺して守ろうとするのだ。この挺身を受け、大島は「私

はかつて、中里さんの懐郷病犯罪者としての危険性を、カール・ヤスパース博士の論文を引き合いに出して、先生に言つてきか

せ、甘野家から彼女を遠ざけるように忠告したのだった。その

彼女が、先生の家族を守るために、かくも誠実に、かくも勇敢

に行動したとは」（一四章）と、自省を余儀なくされる。ヤスパースの理論は、大島の認識を誤らせてしまうのだ。

大島の誤認に示されるように、本作における精神科医は患者をうまく扱えない。そのため、病院の存在をよく思わない人々から批判されてしまふ。批判を行う者としては美貌青年・一条実見が挙げられる。彼は自らを「宮様」と主張する「嘘言症」患者だ。一条はもともと大島の同級生であり、精神科医を志していた。しかし、入院してから彼は精神病院を批判するようになる。それは、大島との会話の中で示される。一条はまず、甘野が「秩序の蜘蛛の巣のまんなか

に坐っている一匹の親蜘蛛」で、大島も「親蜘蛛のまねをして」といっていると皮肉る。大島が「患者があるかぎり、病院なしではすまされ

ないじゃないか」と反論すると、一条は「ぼくらに言わせれば、病院があるかぎり、患者が存在しなくちゃならないんだよ」と、大島の主張を反転させてしまふ。さらに一条は「君の大切にし頼りにする社会、世界」こそ「あきらかに狂気におち入っている」（三章）と述べ、

社会全体が病んでいるかのような物言いをする。一条は、社会全体の異常性を述べることで、病院によって構成される正常と異常という対立が恣意的であることを明るみに出しているのだ。精神病院が患者をつくり出すという一条の論理は、医師への痛烈な批判となっている。

ただ、医師らは批判に承えてもいる。一条に対して大島は反論を試みているし、また会食の際、大島の「患者にやさしくできる人は、生れながらの性格として、そうできるんでしょか」という質問に対し、甘野は「あらゆる場合にやさしくありつづけることなんぞ、同じ人間だもの、できるわけがないよ」と応えた後、次のような見解を示す。

「君はかならず、精神科医師であることを投げすてたくなくなる。彼らが患者であり、ぼくらが医師であるという、その区別の垣をぶちこわしてしまいたくなる。そして、全人類精神病患者論へ、のめりこみそうになる。だが、ぼくたちは、あくまで医師と患者の区別を、守りつづかねばならない。人間のこらず精神病患者なんだという議論ぐらい、いやらしい、甘ったれた、ずうずうしい言いのがれないから
ね」(七章)

大島に承える中で甘野は、医師と患者が「同じ人間」であることを認めた上で、そのような「区別」を無化してしまう意見

を「全人類精神病患者論」という言葉で対象化し、これを難じている。また、引用箇所その後では「全人類精神病患者論」の立場が、「安易で無責任な態度」(七章)と批判されている。甘野は「全人類精神病患者論」が、実際に起きている問題を何も解決しない、責任を放棄する意見に他ならないと考えているのだ。このように本作においては、精神病院批判に対する反論も示されているのである。

以上のように本作では、医師と精神病院への批判者とが対立的に描かれる。ただ、このうち精神病院に対する批判が、作品構造の中で肯定されているとは考え難い。なぜなら病院を監督する憲兵・火田の発言は、一条の発言を留保するものとして読めるからだ。あるとき病院から失踪した一条は、警官に変装し、本物の「宮様」に「日本精神病院改革案」を手渡す。改革案は「宮様」が持ち帰ってしまったため、その内容は分からない。そこで火田は、案の内容を大島に尋ねる。大島はこれまでの一条の言を踏まえ、「日本全体を一つの精神病院に見たてて、その改革案を書いているんじゃないでしょうか」と推測する。それを聞いた火田は「それで、われわれ日本人は総精神病患者と云うことか」と述べた後、「それで、奴ひとり、そうでないと云うわけか」(二五章)と述べるのである。

大島が推測した改革案の論理と、それに対する火田の発言の論理を整理しよう。まず改革案は「日本全体を一つの精神病院」に見立てていることから、日本人全員を精神病患者のよう

な存在と仮定している。一条は社会全体を異常なものとした上で、その改革の必要性を説いているのである。その論理に対して、火田は「奴ひとりか、そうでない」可能性を指摘する。日本全体を病院に見立てる一条の論理は一見、異常でない人間の不在を述べ、医師と患者の対立をなし崩しにしているようだ。ただ、その論理を述べるとき一条は、病院を改革する立場を取ってしまう。つまり一条は、医師と患者の対立を無化する批判を行いつつ、同時に病院を改革するというまさにそのことによって、改革者と被改革者という新たな二項対立を招来してしまっているのだ。患者を治療する主体と、病院を改革しようとする主体は、作り改める客体の水準こそ異なるが、行為の質においては似通ってしまう。火田の発言は、精神病院批判の陥穽を、はからずも明らかにしていると考えられるのだ。

本作において「精神病理学」の知見は、診断を誤らせるものとして取り入れられていた。そのため医師は患者を治療できず、一条から批判される。しかし本作では、批判に対する医師側からの反論も描かれ、火田の発言からは病院批判の論理の陥穽も窺える。つまり『富士』は、精神病院に対して否定的な意見と肯定的な意見とが、登場人物の多声的な関係性を通じて表現された小説であり、否定的な意見も他の登場人物の意見により相対化されるものとして提示されているのである。そして本作のクライマックスである「集団発狂」の箇所において、大島の心情が詳細に描かれることを踏まえると、本作においては批判を

受けつつも患者に相対していかねばならない精神科医の主体のありようが問題化されていると考えられる。次節で考察したい。

四 精神科医の責任

五章の後半から六章にかけて、「麻痺性痴呆」患者の間宮は、自分の飼っていた鳩を迎えるため、「黙狂」の岡村とともに院内の煙突に登る。医師たちは慌てて助けようとするが、無視されてしまう。結局、偶然にも鳩が戻り事無きを得るが、医師が患者を救うことは叶わない。大島ら医師は、この場面においても患者をうまく取り扱えないのだ。ただ、大島は医師としての立場を放棄しているわけではない。それは、煙突を眺めつつ大島が「我々もみんなも、見上げることをやめるわけにはいかなかった」、「止めれば、責任を放棄すること、頭上の二人の患者を見棄てること」になり「彼らと無関係にな」ってしまう、「ほんとうのところ、もはや無関係になっているかも知れないのに、そう自覚して決めてしまうのは、どうしてもできない」（六章）という感慨を覚えている箇所から窺える。

引用箇所で大島は、自らの診断の不能を認めた上で、なお患者から眼を離さないことで、医師と患者という関係性の保持を試みる。間宮は煙突に登った医師らを無視し、周囲を気にしている様子はない。そのため、患者の側からすれば、周囲と自身とは「もはや無関係になっっているかもしれない」。しかし、そ

のように自覚したとき、医師は自らの立場に伴う「責任を放棄」したことになる。そうならないため、大島は患者らと自身が無関係ではないという僅かな可能性に賭け、精神科医としての自己の立場を守ろうとするのである。

このような精神科医のありようを考えるとき、高橋哲哉が「応答可能性」という言葉で整理した主体の責任をめぐる思考は、極めて示唆的である。¹⁷ 高橋は「あらゆる人間関係の基礎には人と人が共存し共生していくための最低限の信頼関係として、呼びかけを聞いたら応答するという一種の『約束』がある」と述べた上で「人間はそもそも（中略）他者の呼びかけに応答しうる存在であり」、「応答可能性としての責任の内にある存在である」と述べる。高橋は人間関係の基底に、他者の呼びかけに対し「応答」する責任のあることを理論化している。ただ、高橋は一方で「人間と動物、動物と動物のあいだではどうなっているのか」という問題が発生するとも述べている。¹⁸ 高橋は、他者に対する呼びかけと、その呼びかけに「応答」する際の約束が、機能しない次元が存在することを述べているのだ。

であるとするならば『富士』では、人間同士の関係性が失われた状況の中で、主体がいかに自らの責任を志向していくのかという課題が模索されている。本節冒頭で確認したように、医師・大島と患者・間宮および岡村の関係性は絶たれていた。ただ、治療をあきらめた場合、医師は自らの責任を放棄した主体となってしまう。そうならないためにも医師は、自身と患者が

無関係な存在ではない可能性に賭け、自身の立場を再び確保していかなければならない。高橋の術語を用いて言えば、精神科医とは「応答」しているかどうか不明の他者に対し呼びかけ続けることで、かろうじて自己の責任を負い得る存在なのである。

そのような精神科医の主体のありようは、「集団発狂」下の大島の形象からも窺える。一条は「宮様」への直訴がきっかけで、憲兵から拷問を受け亡くなってしまう。一条の死を受けて「宮様」からは、戦争末期にも関わらず豊富な食材が下賜される。食材に病院はお祭り騒ぎとなり、医師と患者の区別はつかなくなる。大島も例外ではない。「集団発狂」の渦中、大島は「患者であり得なかつたことの不自由、屈辱、まわりくどさをすべて突破して、何かしらあからさまな自然そのものの光線の下で裸の手足をのさばらせることの歓喜」を覚え、「患者になりうる、患者になりつつあることの快感と恍惚を味わ」（七章）うのだ。ただ、大島はその渦中で、自身が患者のような状態になりゆくことに甘んじているわけではない。なぜなら大島は、以前に見た「黙狂」の岡村と中里さんに耳から長虫を打ち込まれる夢を思い出すことで、¹⁹ 自身を取り巻く状況の認識を試みるからだ。

私の脳と神経の内部に、この病院内で死んでいった多数の患者の面影（と言うより、なまなましい生きざま死にざま）が充満し、虫と虫が咬みあうようにしてうごめき、私

を苦しげらせた。私の目と私の耳は、私の体内にひしめく死せる患者のムシ集団のほかに、私の外界でざわめいて私の生ける同僚の、咬みあい騒動、ムシ闘争を感じとっていた。蟲類^{ムシ}。私は想い出す。想い出さずにはいられない。あの不吉な夢を。(中略)だが、あれは夢ではなかったのだ。

(一八章)

この箇所においては、自らが患者になりゆく過程が、体内が虫に食い荒らされていくことに喩えられている。大島は夢の語彙を用いて、周囲の状況や患者になりゆく自分を、何とか認識しようと試みる。大島は「集団発狂」下において、自らが狂気に侵されゆく過程の自覚を試みることで、かろうじて正気を保とうとしているのだ。さらに次の箇所で大島は、そのような自覚を連続させることで、精神科医としての主体性の回復を試みる。

正気でもあり狂気でもある我々は、何かしらその渦とは反対の極に到達できるという予感を持ちつづけている。何回も、くりかえし、その予感は裏切られる。裏切られることを、また我々は予感している。(中略)この予感が、正気の生みだすものであるのか、狂気のはぐくむものであるか。その審判を下し得る責任者、当局者が、我々精神病学者であるかと問われるさいの戦慄。その戦慄のみが、我々

をわずかに支えてくれているのであるが、困惑すべき中でも最も困惑すべきことには、我々はこの「予感」なしでは、つまり「戦慄」なしでは、一步の前進もできかねるのである。

(一八章)

病院の人々は「集団発狂」に巻き込まれてしまったため、「正気でもあり狂気でもある」。「正気でもあり狂気でもある」状態を離れ、「反対の極に到達できる」ことを、大島は「予感」している。しかし、その「予感」は「裏切られる」。大島の自覚は、誤ってしまう可能性があるので。ただ、大島は自覚の誤る可能性に思い至っても、あきらめずに「予感」が「裏切られる」可能性を再度「予感」する。引用部において大島は、自覚が誤る可能性の自覚を試みている。しかし、自覚が誤る可能性の自覚は、その自覚自体が誤っている可能性にさらされている。大島の認識は永久に安定することがない。そのため大島は「精神病学者であるかと問われるさいの戦慄」を感じてしまう。しかしその「戦慄」を感じていることによって大島は、自らを他の患者たちから差異化し、精神科医としての資格の回復を試みる。「集団発狂」の場面において大島は、自らの認識が誤る可能性を排除できないものの、その認識の不安定さを自覚することによって「精神病学者」であろうし、その「責任者、当局者」であることをかろうじて放棄しない主体として描かれているのである。⁽²⁰⁾このような大島の態度は、精神科医という主体のありよ

うを、端的に表現していると考えられよう。精神科医とは、はじめから患者との区別を前提としてあるわけではなく、むしろその区別が不明瞭であることを起点として自らの置かれた状況を自覚し、責任を志向していくような主体なのである。

以上の精神科医の主体のありようは、はじめから現在時の大島によって知悉されていたのではなく、手記創作の過程で、次第に把握されたものと考えられる。²¹⁾「神の餌」や「神の指」の語を引きつつ、そのことを説明しよう。誤読されやすいが、本作は戦時下の部分だけが手記形式を採るのではなく、序章と終章の部分も含めて全編が手記形式として提示されている。そのことは、手記の書き手が「過去形の文章から、現在形、現在進行形の文章に移る」(傍点・藤原、一章)と宣言していることから窺えよう。そして、手記の最初と最後では、手記の書き手の考えに、ある変化が見て取れる。

序章において大島は、「エサ。ああ、こんなにも手ひどい言葉はいまだかつて私は私の文章のはざまに混入させたことはない」、「私は、エサを与える神になどなりたくはなかった」と書いている。これは、大島がエサを与える対象である動物と、自らの自己同一性とを全く別のものとして考えていることの証左となる。実際、大島はリスに対して、「もし私が彼らを、「見る」ことをやめにしたって、それで私の生命がおびやかされるということなど、ありはしない。「見てやらない」からと言って、私は私でありつつづけることができる」(序章)と述べている。

大島はリスにエサをよく与えている。ただ、大島は、たとえ自分が世話をやめ、リスが死んでしまっても、自分とは何の関わりもないという態度を取り、自身とリスとを基本的に無関係の者同士として捉えているのである。

しかしながら、序章の最後の辺りから、大島の態度はぶれ始める。それは「リスにエサを与える「神」になど、なりたくない」と、この私は言う。だが、それは口さきでそう言うだけであって、当の本人の本心は、はたしてそうなのであろうか(序章)と大島が書いていることから明らかであろう。そして、戦時下の顛末が記された後、終章において大島は「神の餌」について思いまどい、たどりついた末が「神の指」であったことを、私は私の信じていない「神」に向かって感謝したいと思う(終章一)と述べ、自らが動物に対して餌を与え、指を用いて患者の治療を行うという支配的立場に立たねばならないことを引き受ける。「私が医師と患者の関係について、思いなやむときにはきまって、人間と動物の運命的なつながりに話がいきついてしまう」(終章二)とあるように、大島は動物と精神病患者を、同様の存在と捉え、それらの存在と接していかねばならない自身の立場について再考する手記を書いていると考えられよう。以上を踏まえると、「神の指」と「神の餌」は大島が、精神科医が神のような特権的な地位にないにも関わらず、そのような地位を引き受けねばならないことを自覚するために書き付ける言葉だと解せる。『富士』は、大島が手記執筆を通じて自

らの立場を引き受け、動物や患者に対して責任の自覚を芽生えさせていく小説として読むことも可能なのである。

五 おわりに

最後に、本作において戦時下と戦後の時間が設定されることの意味を考察したい。手記の書き手は戦時下の自己を通じて、「応答」しているのかどうか不明の他者に対して呼びかけ続けることで、責任を自己のうちに抱え込もうとする主体を形象化

していた。ただ、そのような戦時下の自身について書く現在の大島の立場も安定してはいない。そのことは、院長の座は継げなかったものの、精神病に関する研究所に所属している現在の大島の、「神の指となつて神の餌をあたえる任務をすてたことになるのだろうか。いや、いや。そんな自由は、死に至るまで私に与えられるはずはない」（終章二）という自戒から明らかである。

大島がこのように述べるのは、旧院長の娘であり現在は彼の妻であるマリが、精神病患者となつているからだと考えられる。そのことは、甘野に代わつて赴任した現在の院長が「奥さんが希望なさるのでしたら、いつでも入院はひきうけますよ」（終章二）と述べていることから窺える。戦時下においてマリは、患者による二度の放火や、問宮の中里きんに対する暴行など、衝撃的な出来事を目撃した。それらが原因で彼女は、精神病と

なつてしまったのだろう。そして現在の大島は、マリとともに生きることを選び取る。大島は、過去にマリを見舞った衝撃的な出来事を桃園病院の患者が起し、その出来事を医師として防ぐことができなかつた責任感から、彼女と生きることを選択したのではなからうか。現在の大島は精神科医とも近似した「精神病理学」の研究者という立場につくことで、自身の責任を引き受けようとする人物なのである。

このように、本作では精神科医という主体のありようが、戦時下に限らず戦後も継続されるものとして表現されている。泰淳は通常の間人同士の関係性が失われた中で、責任を背負わねばならない精神科医の主体性を、戦時下という特殊な状況下だけでなく、戦後にまで継続される普遍的なものとして思考していた。そのことは、泰淳が本作の連載中に発表した書評「馬鹿について」『文学界』一九七〇・二〇）からも窺える。この書評は、精神医学者であるホルスト・ガイヤーのエッセイ『馬鹿について』（満田久敏ほか訳、創元社、一九五八・二二）について書かれたものだ。本書の第二部第五章「戦争と平和」の節において、ガイヤーは第二次世界大戦の敗戦国だけでなく、戦勝国側にも「馬鹿」が多くいることを述べる。それを受け泰淳は、書評中で「戦争のあるなしにかかわらず、結局、人間にはバカの問題をつきつめて行かねばならぬ、個人的責任、共同任務、あるいは逃れがたい使命がある」と述べる。本作の作中時間は大半が二五年前に設定されているため、「応答」不能の他者と関係を結ばね

ばならない主体を描く時期として戦時下が適当であると、泰淳が考えていた可能性は高い。しかし泰淳は本作において戦後の時間に、精神病患者と向き合い続ける人物を登場させている。泰淳は他者に対する非特権性を自覚することで自らの地位を差異化し、責任を抱え込む主体を普遍的なものと捉えていたのだ。

『富士』が発表された一九七〇年前後は、精神病院を批判するメディアの立場と、批判を受けつつも患者に相對せねばならない精神科医の立場が対立していた。本作では、両立場が登場人物の意見として構造化されている。さらに「集団発狂」の場面においては、患者との同質性を自覚することで、かろうじて患者から自己の地位を差異化し、精神科医であることを引き受ける主体のありようが表現されていた。そのような主体は時代を越えてつねに問題となる。そのことは、戦時下と戦後の時間が作品時間として設定されていることの意味の考察から析出した通りだ。先の論述を振り返れば、『朝日新聞』の言説を泰淳は何か問題が起きたときだけ一時的に暴露を行うものとして批判していた。本作では医師の困難な立場が、ある特定の時代に限った問題でないことが表現されている。泰淳は、精神科医の主体の普遍性を踏まえた上で、同時代言説を批判していたと捉えられよう。『富士』は、精神科医の立場の困難さが一時的なものではなく、終わりのない自己への問いとしてあることを表現した作品なのである。

注

(1) 加賀乙彦「溶岩のような力強さ」『中央公論』一九七二(二)にも、同様の指摘がある。また、小池房「武田泰淳著『富士』を読んで」『看護学雑誌』一九七二(九)も、医療従事者による同時代評として注目に値する。

(2) このインタビューは全集未収録であるものの、久山康「滅亡感について」『学生の読書』一九七二(四)がその存在を指摘している。

(3) フロイトは一九二一年に発表した「自伝的に記述されたパラノイアの一症例に関する精神分析的考察」(渡辺哲夫ほか訳『フロイト全集11』岩波書店、二〇〇九・一二)の中で、「パラノイア」の診断が「容易でなく確かでない」と断っているため、自注における泰淳の言は誇張されたものと考えられる。ただ、本作の中には「フロイトも断念していた分裂病の精神療法」(五章)のような記載もあるため、フロイトの知見の不完全性を、泰淳が理解していた可能性もある。インタビューは新聞記者によって再構成されているため、作家の言が極端に伝えられたとも考えられる。本稿では、「精神病理学」の知見を用いた治療が必ずうまくいくわけではないと作家が捉えていたことを証するため、該当部を引用した。

(4) 一九六九年五月に行われた日本精神神経学会金沢大会では、医師の認定制度をめぐって議論が戦わされた。この議論については阿部あかね「一九七〇年代日本における精神医療改革運動と反精神医学」『Core Ethics』11010・11に詳しく。

(5) 東大では一九六八年に精神科医師連合が結成され、翌年から病棟の自主管理が始まった。この経緯は鈴木二郎「日本精神神経学会と東大精神科」(同著編集委員会編『東京大学精神医学教室120年』新興医学出版社、二〇〇七・三)に詳しい。

(6) 佐藤論に関しては特に一六六頁から一六七頁を参照。また兵藤正之助『富士』をめぐって「『武田泰淳論』冬樹社、一九七八・五、樋口覚「武田泰淳の『富士』」(『富士曼荼羅』五柳書院、二〇〇〇・一)、高橋正雄「武田泰淳の『富士』」(『日本医事新報』二〇〇五・一・二六)も同時代状況に言及しているが、登場人物形象と比較がなされているため佐藤論を引用した。ちなみに、佐藤は「生・政治と文学」(『敍説Ⅲ』二〇一・一九)でも『富士』を論じている。

(7) 泰淳の発言に着目した論としては、高橋春雄『富士』武田泰淳(『国文学 解釈と鑑賞』一九八四・五)や、清水靖子「武田泰淳論」(福岡大学日本語日本文学』二〇〇〇・一二)がある。特に後者は、対談「異常と正常のあいだで」(『中央公論』一九七〇・七)に言及している。ただ、清水は本作に天皇制批判を読み込む立場から対談を引用しているため、本稿と論点は異なっている。

(8) 井村恒郎「精神病理学における実存主義」(『精神医学研究Ⅰ』みすず書房、一九六七・九)は、「精神病理学」を「病態意識の心理学的な構成を明らかにすることを課題としている」「精神医学の一分科」と定義している。本稿が「精神病理学」と述べるとき、その意味は井村の定義に従い、また斯学を支える体系を特に「精神病理学」の知見」と表記した。

(9) 初出と初刊以降の刊本で章数に関わる異同はないが、初出では終章のみ分載された。本稿は初出を底本とするため、章数を記す際は『海』一九七一年五月号の掲載分を「終章一」、一九七一年六月号の掲載分を「終章二」と表記する。

(10) 八章には「山本元帥」が「敵の射撃で撃墜された」、「大戦争に突入して緊張しきっている昭和十九年」とある。山本五十六の戦死は一九四三年四月一日であるため、戦時下の部分は一九四三年から一九四四年頃だと推定される。また「あのころから二十五年を経過して」(終章二)とあるため、大島が山荘で暮らす時間は一九六八年から一九六九年頃と考えられる。「二十歳の私と五十二歳の私」(四章)と書かれてもいるが、この箇所は初刊にて「二十三歳と四十八歳の私」と改稿されている。

(11) 「幻聴」(『新潮』一九五二・七)、「恐怖と快感」(『別冊文芸春秋』一九五四・二)、「ゴーストアップ」(『週刊朝日別冊』一九五五・二)、「鶴のドンキホーテ」(『新潮』一九五八・一、三)などが、そのような作品群に該当する。

(12) 加賀が一九五四年頃のことを書いた自伝的小説『頭医者事始』(毎日新聞社、一九七六・五)では、「真夜中に火が出て、病院はほとんど焼け」「死んだ者が十八人」にも似た火災が描写される。「式場精神病院(市川)の火事」(『読売新聞』夕刊、一九五五・六・一八)によれば、病院は一九五五年六月一八日の午前一時頃に出火、一八人の焼死者を出した。火災の起きた時間帯や、死者数の共通性から、加賀の勤めていたのが式場病院だと推定できる。

(13) 「式場隆三郎院長と一問一答」(『読売新聞』朝刊、一九五五・六・一九)には、会見の際、院長を取り囲む記者たちの写真が掲載されている。

(14) 一九六五年前後において精神医療のありようが社会的に問題となっていたことについては、三脇康生「精神医療の再政治化のために」(同ほか編『精神の管理社会をどう超えるか?』松籟社、二〇〇〇・四)が批判的に取り上げている。

(15) 「懐郷と犯罪」は、懐郷と思春期発育の少女の問題を論じたもの。宇都宮芳明「精神病理学者への道」(『ヤスパース』清水書院、一九六九・六)によれば、この論文は一九〇九年に、ハイデルベルグの精神科クリニックにヤスパースの学位論文として提出された。

(16) 原著はG. Karl Jaspers, *Heimlich und Verbrechen*. (Verlag von F. O. W. Vogel, 1909)では、四五頁から五三頁にかけてアポロニアへの言及が確認される。なお、原著では症例が客観的に記述される一方で、本作における大島は少女の口吻を用いて症例を説明している。甘野が「一条君ならともかく、君がそんな話方をすると、意外だね」(七章)と述べていることから、この異同は大島と一条実見とが、医師と患者という立場の違いがあるにも関わらず似かよっていることを表現するために設けられたと想定できる。

(17) 高橋哲哉「戦後責任」再考(『戦後責任論』講談社、一九九九・一二)の第二節を参照。高橋は同著で戦後における日本の戦争責任について論じているが、「戦後責任の問題を離れて

こういうことを考えてみたい」と述べられるように、同節は主体の責任をめぐる抽象的な思考が展開されているため、精神科医の主体のありようが問題化された本作の分析に援用しても差し支えないと判断した。

(18) 本稿は、高橋が「動物」と述べる存在と、『富士』における精神病患者を、主体の呼びかけに対し「応答」しているのかどうか不明の他者であるという点において、同等のものとして扱い論述を行う。もちろん、実際に「動物」と精神病患者が同等の存在であるとは考えにくい。ただ、本文に「私が医師と患者の関係について、思いなやむときにはきまって、人間と動物の運命的なつながりに話しがいきついでしまう」(終章二)とあるため、本作を論じる限りにおいては、両者を同等のものとして扱った上で、作品分析を行う立場が妥当であると判断した。

(19) 長虫の夢については、一四章で詳述されている。
(20) 西原啓「マグマの噴出」(『新日本文学』一九七二・四)、重岡徹「富士」論(『山口大学教養部紀要』一九七五・一〇)、中野信子「武田泰淳『富士』と『ヨブ記』」(『キリスト教文学研究』一九九五・五)、重岡徹「武田泰淳の全体性について」(『山口国語教育研究』一九九八・七)、藤本成男「武田泰淳『富士』論」(『日本のニヒリズムの行方』大学教育出版、二〇一一・五)は、大島が「予感」と「戦慄」を感じる場面に着目している。先行論を受け本稿はこの場面を、精神科医の主体のありようが端的に示された部分として解釈した。

(21) 道園達也「武田泰淳『富士』論」(『方位』二〇〇一・六)は、本

作が手記形式で書かれた意味を考察している。ただ、道園は「神の餌」や「神の指」という言葉の意味については論及していない。本稿ではそれらの語をめぐる現在の道島の認識が、序章と終章で変化する点を積極的に論じた。なお、石崎等『富土』、『国文学解釈と鑑賞』一九七二・七）、川西政明『遙かなる美の国』（福武書店、一九八七・七）、新見公康『武田泰淳『富土』を読む』（『国文学論考』二〇一五・三）も、本作の形式面に着目している。

(22) 戦時下の経験が原因で、大島（甘野）マリが精神病患者になってしまっていることは、すでに柄谷行人「真理の彼岸」、『文芸』一九七二・二）や、道園（注21に同じ）が指摘している。先行論を踏まえ本稿では、マリが精神病患者となっていることが、戦後の大島の立場を規定していることを積極的に論じた。

【付記】 武田泰淳の文章の引用は、特記したものを除き初出に拠った。原則として漢字は新字体に改め、ルビや参考資料の副題は適宜省略した。引用文中の（中略）、／（改行）、（一）（注記）は藤原による。なお本稿は、第一九回占領開拓期文化研究会（二〇一五年三月一四日、於龍谷大学）での口頭発表を経て作成した。各席上でご指導頂いた方々に感謝申し上げる。また、二〇一四年度日本近代文学会・秋季大会（二〇月一九日、於広島大学）にて、村上克尚氏のご発表「狂気と動物——武田泰淳『富土』における国家批判」を拝聴した。ご発表は「反精神医学」言説を参照しつつ、同時代における作品の位置を定めるものであった。ただ、本稿は対談における作家の態度を起点として作品を再考するものであ

るため、氏のご発表と本稿の論点は重ならないと判断した次第である。